

石川啄木直筆資料展

「明治41年6月～8月の書簡より」

函館市文学館では、石川啄木の直筆書簡121通を収蔵している「函館啄木会」のご協力をいただき、下半期に、「石川啄木直筆資料展」として、啄木の書簡を展示しております。今年度は、明治41年6月～8月に東京市本郷から宮崎大四郎（郁雨）と岩崎正（白鯨）に宛てた書簡8通を展示します。

啄木が北海道漂泊を終え、文学で身を立てるために家族を函館に残し、明治41年4月に単身上京した後の、6月8日から8月4日までの近況などを知らせる手紙です。原稿用紙、便箋、官製はがき、絵はがきに書かれた文面から、啄木の当時の様子や思いが伝わってきます。

5月から小説を書き出したことを報告し、「啄木は病気せぬ程度に於て死物狂ひだと同入諸君に御伝へ被下度候」と書いた手紙。小説が売れて、お金が入るので「少し安心してくれ玉へ」と送ったはがき。健康をそこねた宮崎を心配して、「家の事でいくら君に心配かけてゐるかと思ふと、たまらなくなる」と書いた手紙。岩崎への長い手紙（便箋2枚半に10頁）には、「毎日筆と相撲をとつて、苦しんで、汗を流してる」「成るべく詳しく僕の近況と所感を書かうと思つて」と書き始め、さまざまな事を書きつらね、「何だか気がおちついた様だ」と締めくくっています。函館に残してきた娘の京子がまた病気になり、世話になっている宮崎に感謝し、その思いを「泣かず笑はざる心の味」と表現したはがき。7月29日付には「八月は大に書く。大盲動をやる」と書き、8月4日のはがきで「肌着一枚にサルマタで盲動してゐる」と知らせています。

これらの啄木の直筆の書簡から、明治41年夏の石川啄木の様子だけではなく、当時の東京、その時代の文壇の交流についてなど、明治時代の歴史的背景についても読み取っていただければ幸いです。

展 示 資 料

1. 明治41年6月 8日 宮崎 大四郎 宛書簡
2. 明治41年6月14日 宮崎 大四郎 宛はがき
3. 明治41年6月17日 宮崎 大四郎 宛書簡
4. 明治41年7月 7日 岩崎 正 宛書簡
5. 明治41年7月 7日 宮崎 大四郎 宛はがき
6. 明治41年7月29日 宮崎 大四郎 宛書簡
7. 明治41年8月 4日 宮崎 大四郎 宛はがき
8. 明治41年8月 4日 宮崎 大四郎 宛はがき



期 間 平成30年10月6日(土)～平成31年4月3日(水)
(休館日 11/12～17 12/12 12/31～1/3 1/17 2/21 3/21)

会 場 函館市文学館2階展示室